

『義雲錄』における『宏智錄』引用の意義

石川力山

一、はじめに

建長五年（一二五三）道元滅後の永平寺教団は、道元の弟子懷弁・義介・義演等が相次いで永平寺に晋住するが、世に三代相論と呼ばれる内部分裂や、永仁五年（一二九七）、山門と方丈を残してすべて焼失する火災を経過し⁽¹⁾、さらに正和初年（一二二頃）義演が永平寺を退院し、次いで示寂するや、永平寺はついに無住状態となるにいたり、いわゆる「大破滅法に及ぶ」と表現される破局に当面した。⁽²⁾この事態に際して、永平寺檀越波多野氏の懇請により荒廃した永平寺に晋住し、その復興に当ったのが、寂円の法嗣で宝慶寺二世義雲（一二五三～一二三三三）である。

さて、正和三年（一二一四）十二月二日、永平寺に晋住した義雲は、宝慶寺の什物まで持ちこんで永平寺の復興につとめ、また道元の『正法眼蔵』（以下『眼蔵』と略称）の書写蒐集

などにも努力し、後世、永平寺中興の祖と称されることは周知のごとくである。そして、この義雲の宗教思想についての従来諸先学の見解は、義雲は終始一貫して道元の遺風顯彰につとめ、その宗教は全く道元の思想宗教と軌を一にするものであるとか、あるいは、義雲が最も力をそいだのは、道元禪の再興であり、その本領は終始一貫道元禪の恢興を願う慕古の精神に貫かれていたと評価され⁽⁵⁾、堂塔伽藍の復興とともに、道元禪の再興という、まさに物心両面にわたる、名実共に中興たるに想応しい人とされるのが、今日の一般的義雲像である。

たしかに義雲は、若くして道元の『眼蔵』の淨写に志し⁽⁶⁾、諸方に散逸していた『眼蔵』を蒐集して、義雲本と呼ばれる六十巻本の『眼蔵』を編集したとされることや、あるいは、嘉曆四年（一二三九）七十七歳の時、『眼蔵』の一巻毎に、その要旨を端的に詠みこんだいわゆる『正法眼蔵品目頌』を作

つたが、その序には、

正法眼藏密伝密付、古之与今嫡伝嫡祖。永平元祖入宋穿鑿五葉之根蒂、帰朝能為一天之蔭涼。忘殺婆心、以和字柔漢語、奇妙善巧、令入不累文言。如石含玉、似地擎山。聊綴卑語述其大旨耳。後昆此八字不打開、妙心源未通徹、一大藏經少林妙訣、夢也未見在矣。嘉曆四年中夏、曾孫義雲和南拝書。

(『義雲錄』卷下、T. 82 p. 476a)

とあり、後昆の者が宗旨の根幹として『眼藏』に依拠すべしことを明記していること、さらには、道元の山居の偈にならって自ら作つた、やはり「山居」と題する偈二首は、

吉祥峯頭不人間 莫作四時遷変看
兀坐寥寥無對待 青山深處白雲閑

林下幽閑一世貧 無由向外問疎親
清風白月賓兼主 去就平常不誑人

(T. 82 p. 468b)

といふものであり、世俗の紅塵を避けて兀々と深山に打坐する道元の風格とまさしく一枚になつた姿を髣髴させるものがあり、これらを通して見る限りの義雲像は、道元の投影を離れることができない。

しかし、ここで少しく厳密にこれらの事柄を検討してみる

なら、このようないくつかの道元と一体としてとらえられる義雲像とい

うものは、あくまでも義雲の行動ないしその周囲を形成する客観状況から推論によつて導き出された義雲像であり、義雲のいかなる思想的宗教的面が道元の立場と軌を一にするのかということについて、具体的にいうなら、義雲の宗教思想（『義雲錄』と略称）のいかなる点が道元の宗教と軌を一にするのかという点については、さほど明確な論証があるわけではない。逆に、『義雲錄』を読んでまず驚かされるのは、中国曹洞宗の一派である宏智派の祖宏智正覚（一〇九一—一一五七）の語錄からの引用が実際に頻繁に出てくるということである。道元の語錄からの引用も多く見られるが、その頻度数において『永平廣錄』をはるかに凌駕する『宏智錄』からの引用例を無視して義雲の宗教思想を論ずることはもはやできないであろう。

また、道元が『眼藏』（春秋）で、

あるひは野猫児、あるひは田庫奴、いまだ洞山の堂奥を参究せず、かつて仏法の道闇を行李せざるともがら、あやまりて洞山に偏正等の五位ありて、人を接すといふ。これ胡説乱説なり、見聞すべからず。ただまさに上祖の正法眼藏あることを参究すべし。
(岩波文庫本、中、p. 382)

とまで言つて排斥する五位説についても、義雲はしばしばこれを用いて为人接衆しており、さらに、道元が『眼藏』（四

禅比丘)において、この語があることによつて『六祖壇經』を偽書とまで断言した「見性⁽⁷⁾」の語についても、義雲の「永平寺語録」の上堂語には、

上堂、拳、僧問雪峰、声聞人見性如夜見月、菩薩人見性如昼見日。未審和尚見性如何。峯打三下。其僧後問岩頭。頭打三掌。雪豆拈云、應病設樂。且与三下。若拏令而行、合打幾多。師曰、永平見性不同聲聞、不同菩薩、不同三大老漢。諸人著眼見取。卓拄杖三下、乃下座。(『義雲録』卷上、T.82 p.466 a)

とあり、決して見性的語を否定はしていない。この外、従来では道元親集の第一次編集の時点にまでさかのぼる説も提起されており⁽⁸⁾、義雲と六十巻本『眼藏』についても、近年義雲編集と見られていた六十巻本『眼藏』を結ぶ線は再検討をせまられている状態にある。

このように考えてくると、従来感覚的心情的にとらえられていた義雲の人間像、ないし禅思想そのものについても、さらに詳細な分析検討を通して、改めて整理しなおす必要が生じてくる。このことはとりもなおさず、道元の禅がその後の児孫達にいかに受けとめられ、いかに受け嗣がれたかというこの実態を究明するための、換言すれば、中世禅思想研究のための基礎的作業に外ならない。

本論は、これら諸問題の整理の第一段階として、『義雲録』における『宏智録』からの引用の持つ意味を検討することに

より、義雲の禅思想形成における宏智の禅へのかかわりといふものを探つてみようとするものである。

二、『宏智録』引用の類型

『義雲録』における『宏智録』からの引用例は、その主なもののを附録として後に一覧にし掲載しておいたが、これらの引用は、およそ三つの類型に大別分類できると思われる。

その第一の類型は、宏智の文学的趣味の汪溢した文艺性豊かな詩句をそのまま借りて、上堂や小参の最後に、結語あるいは一転語として使用している例である。

所で、元來、言詮を絶し直觀を重んずる禅宗において、言語を象徴的比喩的に用いる韻文により禅の宗旨を表現しようとする傾向は唐代以来伝統的なものであった。宋代・元代には禅僧と士大夫階級との接触も深まり、さらに、貴族・官僚出身の禅僧も多く輩出したことにより、漢詩はもとより、四六文などの俗界の純文学もそのまま禅林に移植され、禅宗と文学との密接な関係は助長された。⁽¹⁰⁾『宏智録』においてもこの傾向は顕著で、義雲はこの宏智の詩句を多く借用しているのである。たとえば、

翡翠踏翻荷葉雨、鷺鷺衝破竹林煙。(附録I-②)

という句は、『宏智録』にはしばしば出てくる慣用句であり、他にも、

清白十分江上雪、謝郎滿意釣魚船。（附録I—(5)

鄺中雖有隱形術、爭似全身入帝鄉。（附録I—(6)

風月寒清古渡頭、夜船撥轉瑠璃地。（附録I—(13)

金繩拽轉泥牛鼻、半夜馳來海上耕。（附録I—(15)

水自竹辺流出綠、風從花裏過去香。（附録I—(16)

莫道鯢鯨無羽翼、今日親從鳥道回。（附録I—(20)

などの引用がある。これらはいずれも、真如の世界の風光を詩的に表現した句句であり、義雲はこれをそのまま引用して、自己の一転語として用いているのである。これら慣用句の引用は、義雲の禅と宏智の禅の直接的な関係を示唆するものではないが、義雲が『宏智錄』の内容を熟知し、その禅に深く傾倒していたことを端的に物語っているということができよう。

第二の類型としては、宏智の上堂や小参の語を、殆んどそのまま引用して義雲自身の示衆語として説示している例で、
附録I—(1)(3)(5)(7)(23)などはその典型的なものであり、義雲独自の宗旨の挙揚は何も見られない。また、附録I—(8)(12)(14)(17)
(19)(24)(25)(26)なども、やはり宏智の語を殆んどそのまま引用し、さらに義雲自身の語もある程度含むものであるが、基本的には宏智の宗旨を出るものではなく、後述する五位説に関する引用もこの部類に属するものと見られる。

第三の類型としては、明らかに宏智の語や宏智の主張を意

識しながら、これを自家薬籠中のものとして充分に咀嚼し、その内容を駆使して自己の宗教を説示している例で、附録I—(11)(14)(18)などがこの部類に相当すると思われる。そして、この第二・第三の類型に相当する引用例が、義雲の宗教思想を検討する上で最も重要な示唆を与えてくれるであろう。

三、宏智の禅と義雲の禅

さて次に、これらの宏智の語の引用例を通して義雲の禅思想の特徴を検討するわけであるが、その前に、道元も古仏とまで言って尊崇し、その「坐禅箴」なども高く評価する宏智の禅の特徴について略述しておく必要がある。そのためには、やはり当時の禅界の双璧と目される臨済宗楊岐派大慧宗杲（一〇八九—一一六三）の禅と対象させて把握するのが至当であろう。

所で、この宋代看話禪の組織を大成した大慧の禅は、「大疑の下に大悟あり⁽¹¹⁾」という前提の下に、たとえば『大慧書』「答呂舎人」には、

千疑万疑只是一疑。話頭上疑破、則千疑万疑一時破。話頭不破、則且就上面与之斷崖。若棄了話頭、却去別文字上起疑、經教上起疑、古人公案上起疑、日用塵勞中起疑、皆是邪魔眷屬。第一不得向舉起處承當。又不得思量卜度。但著意就不可思量處思量。心無所之、老鼠入牛角便見倒斷也。又方寸若闇、但只擧狗子無仞性性

話。仏語祖語諸方老宿語、千差万別、若透得箇無字、一時透過、不著問人。若一向問人仏語又如何、祖語又如何、諸方老宿語又如何、永却無有悟時也。(T. 47 p. 930 a)

とあるように、主体的な疑問を起して話頭を思量する、徹底した看話に身を置き、また『同』「答富枢密」には、

我此門中、不論初機晚学、亦不問久參先達、若要真箇靜、須是生死心破。不著做工、生死心破則自靜也。先聖所說寂靜方便、正為此也。自是末世邪師輩、不會先聖方便語耳。左右若信得山僧及、試向閑處看。狗子無仮性話。云々。(T. 47 p. 922 a)

とあるように、すべての活動が生死の問題解決のためにあるとし、常にこの生死の岩頭に立つて盤石なる悟りの上に腰をおちつけ、当処當処にその悟りの境界を実現せしめてゆこうとする、極めて動的な、大機大用的な禅としてとらえることができた。

これに対しても宏智の禅は、『宏智録』(卷八)「默照銘」には、黙黙忘言、昭昭現前。鑒時廓爾、体處靈然。靈然独照。照中還妙。露月星河、雪松雲嶠。晦而弥明、隱而愈顯。鶴夢煙寒、水含秋遠。浩劫空空、相與雷同。妙存默處、功忘照中。

(T. 48 p. 100 a)

とあり、また『同』(卷六)にも、
真實做處唯靜坐默究、深有所詣。外不被因緣流轉、其心虛則容、其照妙則準。內無攀緣之思、廓然獨存而不昏、靈然絕待而自得。

(T. 48 p. 73 c)

とあるように、外縁による流転を被らず、あくまでも綿密安祥、黙々と静坐し深く自己の心の内に契当する所にこそ真実の悟りの世界があり、それは晦まそうとしてもいよいよ明らかに、隠そうとしてもますます顕われるという、個人体験的な自受法樂の世界を説く、極めて静的な性格を持つた宗風としてとらえることができる。

このような宏智の禅を前提にして、『義雲録』の『宏智録』引用をみてみると、たとえば、『義雲録』(卷上)「宝慶寺語錄」の、

上堂、廓爾而靈、本当自照、寂然而應、大用現前。木馬嘶風不運今時之步、泥牛出海耕破空劫之春。諸人相委悉麼。玉人招手處、復妙在廻途。(T. 82 p. 460 c) (附録I—(1)参照)

という上堂語は、黙々として外縁に涉らず、深く自己に省するところに自ら寂然として大用が現前するという、まさに宏智の默照禅の性格を極めて端的に示している箇所の引用であるが、義雲はこの宏智の語を一句一字変えることなく、自己の宗旨として説示している。また同じく「宝慶寺語録」の、
上堂、世尊有密語、迦葉不覆藏。死中有活、不被空礙。活中有死、不被物礙。有不是有、無不是無。芭蕉和尚道、爾有拄杖子与爾拄杖子、爾無拄杖子奪爾拄杖子。畢竟作麼生。心地含諸種、普雨悉皆生、既悟華情已、菩提果自成。

(T. 82 p. 460 c ~ 61 a) (附録I—(3)参照)

という上堂語も、宏智の禅の、生死・有無の一見対待の境にとらわれず、随處・当處に自由に出生入死する世界をそのまま借用したもので、ここでも義雲は、自己の見解を全く附加することがない。さらに「宝慶寺語録」の、

結夏上堂、我住則汝同住、我行亦汝共行。打得諸仏要機而結制、拈提祖師心印而護生。山高不礙雲倚、如父如子。谷虛有應声響、為弟為兄。既得恁麼和同、還有什麼行履。良久云、瓊樹寸寸寶、梅檀片片馨。(T. 82 p. 462c) (附録I—(7)参照)

という結夏上堂の語、及び「永平寺語録」の、

結夏上堂、尽乾坤大法界、是我一箇身便能禁足。遍塵刹諸有情、是我真箇漢方解護生。禁足也、步步不妄移、護生也、心心不妄動。所以道、以大円覺為我伽藍、身心安居、平等性智。仏仏到此同帰、人人住此法爾。還要委悉麼。一輪皎月大圓覺、刹海三千鐵一団。步步点空無朕跡、人人喚為我伽藍。

(T. 82 p. 464c) (附録I—(14)参照)

という結夏上堂の語は、いざれも宏智の「天童山上堂語録」の結夏上堂語を骨子とする示衆で、父子の如く、兄弟の如く、衆僧和合することによつて安居の成就を期せんとしたものであり、大慧の禅が、常に生死の二字を鼻尖頭上につけ、一大疑国を起こして公案・話頭に参ずる看話を策励するのとは好対照をなす、宏智の綿密安祥の宗風を、義雲は深く肯つてこれらの語を引用したものである。⁽¹²⁾

このような『義雲録』における『宏智録』からの引用を通して見られる義雲の禅思想は、その殆んどが宏智の宗旨を出るものではないが、これに関連して、義雲がしばしば用いる鏡と像の比喩について考えてみたい。即ち、「宝慶寺語録」の入寺開堂語に、

上堂云、百川向大海而到、到了無異名。一心隨万境而轉、轉後住本位。將鏡鑄像、鑑照不得。將像鑄鏡、光明自新。主不出閨外招遍身之手接往来、賓受用途中活通身之眼鑑今古。

(T. 82 p. 460c)

とある。⁽¹³⁾ そして、「」でいう照らしうつし出される像も、照らす主体である鏡も、決して別個のものではないと解される。すなわち、經典や公案・話頭というような鏡でもって心地を照らし、自己という不動の像を確立するという意味ではなく、照らす鏡も、実は自己本具の用であり、像はその体と考えてよい。而して、外縁に涉ることなく、静坐默究するところに、自己の光明（大用）がおのずと顯現するという意に解すべきであろう。したがつて、この鏡と像の比喩は、鏡という用の面を立てれば、かえつてそれはたらきはくらまされてしまい、逆に、一切處に受用する本源の体に安坐するところにこそ光明がおのずと輝き出す世界があるという意味であり、このような禅は、まさしく宏智の黙照的性格を極めてよく表現しているといえよう。『義雲録』のこの「宝慶寺入寺

開堂録」の上堂語に引き続いて、「上堂、廓爾而靈、本光自照、寂然而應、大用現前、云々。」（附録I—(1)参照）という、『宏智録』そのままの引用の上堂語が存するが、この二種の上堂語は恐らく同一時期のものと見られるから、義雲が鏡と像の比喩を用いるのは、宏智のこの語が前提になつてゐるとも考えられる。この語は小参でも引用される（附録I—(9)参照）。

四、義雲の禅と五位説

次に、『義雲録』における特異な五位説の受容について考へてみる。

周知のことく五位説とは、中国曹洞宗の祖洞山良价（八〇七—八六九）・曹山本寂（八四〇—九〇一）によつて創唱唱道された機関の一で、曹洞宗旨の指標ともなるものであり、日本曹洞宗宏智派の東明慧日（一二七二—一三四〇）や東陵永興（一三六五）も自己の宗旨の旗印として挙揚しており、¹⁴⁾道元派下においても、瑩山紹瑾（一二六八—一三二五）をはじめ、特に峨山韶碩（一二七五—一三六五）以後重要視され、中世における道元下の曹洞宗を特色づけるものは、道元の宗旨の研究ではなく、この五位に重点が置かれていたとも言い得る一面があり、このような風潮が近世初頭まで続くのである。しかし、既に見たように、この五位説を道元は、少くとも形式的な面では宗旨の根本とすることを激しく嫌つてゐる。とこ

ろが、あれほど道元を追慕したとされる義雲も、『義雲録』によるかぎり、五位説に依頼してなしていの上堂示衆がいくつか見られるのである。

ところで、従来義雲の五位説については、これを誰から承けたかは全く不明であり、また内容的にも、峨山や南英謙宗（一三八七—一四六〇）によつてさかんに唱道された五位説とも異なるといわれてゐる。すなわち、洞山・曹山によつて創唱された五位説は、正中偏・偏中正・正中來・偏中至・兼中到の五からなる、内容的にも元來は傍提・兼帶を特色とする偏正五位説であるが、この五位説が臨済宗汾陽善昭（九四七—一〇二四）や、その法嗣石霜楚円（九八六—一〇三九）によって依用されると、第四位「偏中至」の名称が「兼中至」に変えられ、さらに内容的にも、正中來中心の著るしく功勲的なものに変貌して、中国の大陽警玄（九四三—一〇二七）や投子義青（一〇三一—一〇八三）・宏智正覚（一〇九一—一一五七）をはじめ、我国で行われた五位説も、殆んどが兼中至・偏中至混用か、石霜五位をそのまま受け継いだ功勲的性格が強いもので、洞山・曹山本来の五位説は、近世末期の洞水月湛（一七二八—一八〇三）の『五位顯訳元字脚』に至るまで見直されなかつたとされるのが今日の一般的の見解である。¹⁵⁾所が、『義雲録』の「宝慶寺語録」には、

上堂、衆流投大海、鹹淡味同。四夷帰一朝、君臣道合。所以四種

分主賓、五位列偏正。雖然如是、立正則正外無偏、五位俱正中來、立偏則偏外無正、万物各偏中至。不見道、我逢人則便不出、出則便為人。我逢人則便出、出側便不為人。良久云、偏正不曾離本位、無生那涉語因縁。(T. 82 p. 463 a)

とあり、第四位を明らかに「偏中至」としており、名称・形式的には勿論、内容的にも、正位を立てれば偏位は立たず、

偏位を立てれば正位は立たない、不回互の世界を説示しており、汾陽や石霜の正中來中心の五位とは異なる、洞山・曹山本来の五位に近い説を唱えているとみられる。この五位説を義雲が誰から受けたは全く不明であり、ただ義雲の参学の経過からみて、師の寂円(一一〇七~一二九九)が、従来比定可能な唯一の人であつた。⁽¹⁷⁾

所で、既に述べたように、宏智にも五位説の挙揚があるが、その内容は、『宏智録』(卷八)の「五位頌」によれば
正中偏 霽碧星河冷浸乾、半夜木童敲月戸、暗中驚破玉人眼。
偏中正 海雲依約神山頂、歸人鬢髮白垂絲、羞對秦台寒照影。
正中來 月夜長鰐蛻甲開、大背摩天振雲羽、翔游鳥道類難該。
兼中至 觀面不須相忌諱、風化無傷的意玄、光中有道天然異。
兼中到 斗柄橫斜天未曉、鶴夢初醒露氣寒、旧巢飛出雲松倒。
とあり、名称の上ではやはり石霜五位を踏襲している。しかし『宏智録』を子細に検討してみると、卷一の「小参」に、小参、僧問、如何是正中偏。師云、天共白雲曉。進云、如何是偏

『義雲録』における『宏智録』引用の意義(石川)

中正。師云、水和明月流。進云、如何是正中來。師云、莫道鯤鯓無羽翼、今日親從鳥道廻。進云、如何是偏中至。師云、當機不回互、敵面無後先。進云、如何是兼中到。師云、寶殿無人不侍立、不種梧桐免鳳來。進云、五位已蒙師指示、向上還更有事也無。師云、有。進云、如何是向上事。師云、乍可截舌、誰敢當頭。

(T. 48 p. 16 a)

とあり、明らかに第四位を偏中至とし、不回互を内容とする問答が見られる。しかも、第三位正中來の間にに対する宏智の答語「莫道鯤鯓無羽翼、今日親從鳥道廻」という句を、義雲は他所でこのまま借用し、小参の結語として用いており(附録I-20参照)、義雲は宏智のこの小参の語を明らかに熟知していたものと解することができる。さらに、義雲の「良久

云、偏正不曾離本位、無生那涉語因縁」という句も、実は宏智の小参の結語をそのまま仮りて用いているのであり、義雲はこの句を他の上堂の結語としても用いている(附録I-4参照)。

宏智の五位説にもとづくと見られる説示をもう一例掲げる

と、やはり「宝慶寺語録」にある、

上堂、万機休罷、千聖不携。一言相契、古今一揆。暗中著眼、明裡藏身。借位明功、体在用處、借功明位、用在体處。所以道、君臨臣位猶帶凝然、子就父時尚存孝養。玉闕未透正迷一色、寶印全披露那文彩。還要委悉麼。傍觀者哂、當局者迷。

という上堂語は、所謂宏智の四借とよばれる機関を依用したものであるが、この説示も、『宏智録』卷四の、

上堂、問、一点靈然不覆藏、明明老蚌夜吞光。箇時撥転機輪也。

体用由來総不妨。如何是借功明位、用在体處。師云、光在體時常

湛湛、體含光處却靈靈。進云、如何是借位明功、體在用處。師云、紛擾擾時常隱隱、闊嘈嘈處却閑閑。進云、夜月有輝含古渡、白雲無雨裏秋山。師云、邯鄲學唐步。師乃云、青山不用白雲朝、白雲不用青山管。雲常在山山在雲。青山自閑雲自緩。諸禪德、若恁麼體得方知道、借功明位、用在體處、借位明功、體在用處。体用無私、方乃唱道。且道、作麼生是体用無私底時節。水向竹邊流
出綠、風從華裏過來香。（T. 48 p. 41a～b）

という上堂語を前提したものであることは明らかであり、宏智の「水向竹邊流出綠、風從華裏過來香」という句も、義雲は他所でこのまま借用して、上堂の結語として用いている（附録I-16参照）。しかも、義雲の「君臨臣位、猶帶凝然、子就父時、尚存孝養。玉闕未透正迷一色、寶印全提露那文彩」という語も、『宏智録』（卷五）の小参語からの引用であり（附録I-8参照）、この部分の義雲の上堂語の大半は、宏智の語の引用によって構成されているといつてよい。

くとも字句の上からは、宏智の五位説を受けたものであり、

(T. 82 p. 463a)

極論すれば、宏智の語そのままの祖述といつても過言ではない一面を持っている。従つて、義雲にとって五位説は、その禅の特質に殆んどかかわらないものであつたともいえよう。

五、おわりに

以上、義雲の語録について、『宏智録』からの引用という点に限つてこれを分析し、その引用例と、これをもとにした若干の考察を展開してきたが、『義雲録』の上堂・小参等がいかに『宏智録』の内容を前提にしてこれをふまえて説示されているかが理解できよう。これら諸点を結論的にまとめるなら、第一に、義雲は『宏智録』の内容には深く精通しており、その詩的文学的表現を隨處に引用しているのはこれを端的に物語つていいこと、第二に、『義雲録』には宏智の語をそのまま引用して自己の宗旨として説示している例が極めて多く、その引用頻度数からみても、また内容的にも宏智の禅に深く傾倒していたと見られること、第三に、義雲は道元が否定した五位説も高く評価し、これによつて為人接衆する例がいくつか存するが、それらは殆んど『宏智録』を前提するものであり、また宏智の五位説をそのまま祖述したと思われる部分もあり、義雲が五位説を用いるのは、結局宏智がこれを用いたからにほかならなかつたとみられること、以上

ところで、五山文学の雄と目される中岩円月（一二〇〇～一三七五）は、自らその『自歴譜』の中で、文保二年（一一二八）、十九歳で入宋しようとして果たず、この年の冬、永平寺の義雲に参じてほぼ洞宗の語言に通達したと述懐しているが、中岩が義雲に参じて得た「洞宗の語言」とは具体的に何を指すのであろうか。永平寺で洞上の宗旨に通じたといえば、常識的には道元の宗旨に参じたということになるが、文保二年といえば、義雲が大破滅法におちいった永平寺に晋住了した正和三年（一一三四）十二月から数えてわずか四年目であり、火災等で焼失衰頽した伽藍の復興修造に日夜渾身の努力をしていた時期に相当し、永平寺自体混迷の時期をようやく脱しつつあつた頃で、中岩が越前にまで赴いて参じなければならぬ必然性が見当らない。また中岩は、後には上州利根の吉祥寺入寺陞座に際して、臨濟宗大慧派百丈山の東陽徳輝の法嗣であることを表明して、東明門下から迫害を受け物議をかもし出しが、この時期は終始東明手度の弟子として行動しており、入宋の企てなども東明の指示によつたと見られるから、義雲参学も当然東明の指示に従つたものと思われる。そして、東明が中岩の義雲参学を勧奨したとすれば、それは同じ曹洞宗の流れをくむ来朝者としての寂円の系譜に連なる人に対する接近という線が第一に出てくる。

いつた、寂円という禅僧に関しては、蘭溪道隆（一二一

三～一二七八）や子元祖元（一二二六～一二八六）以前に来朝した、渡来僧としては最も早い時期の人であるにもかかわらず、中国の禅の相承を受け嗣がずに若年にして渡来したためか、從来、渡来僧としての面は往々にして看過されているような気がする。しかし、『宝慶由緒記』が伝えるような、如淨の下で得悟し、大宋國の諸山の名師に参じ、東西の玄奥を究めたという寂円像をそのまま首肯することはできないにしても、明らかに中国曹洞禅の流れの系譜に連なる人であり、東明も面識はなかつたとしても、同じ曹洞系の来朝者としての同胞意識は当然あつたと見られる。しかして、中岩が義雲に求めた洞上の宗旨、換言すれば、東明が寂円に求めた洞上の宗旨とは、中国曹洞禅としての宗旨に相違なく、中国曹洞禅の系譜に連なる人として東明は寂円の系統の禅者として義雲を推薦したものと思われる。

また、寂円の禅思想については、孤雲懷弁（一一九八～一二八〇）との投機の機縁以外全く知られていないが⁽²⁰⁾、義雲が宏智の禅に傾倒するに至つた経緯は、寂円の影響によるとしか考えられない。しかし、いざれにしてもこれら諸点は資料的に推測の域を出ないもので、教団史・思想史を含めた中世寂円派の研究は多くの課題を残しており、今回は義雲の禅と宏智の禅との関係を指摘するにとどめて擱筆する。

〔註〕

(1) 『安樂山産福禪寺年代記』による。横山秀哉氏「曹洞宗伽藍建築の研究」(1) (『東北大学建築学科、建築学報』第三号、

p. 16 昭和三十年三月) 参照。

(2) 「正和年中、永平寺義演禪師遷化、斯時有三代相論、永平寺及大破滅法、云々」(『曹洞宗古文書』卷下、p. 619 『宝慶由緒記』)

(3) 「宝慶一世義雲禪師見之、乃祖道元禪師遺跡及断絶、深嘆息在之、命嗣子曇希禪師、紹宝慶之主席へ義雲禪師、命曇希禪師、宝慶之寺物取持、永平之諸堂円備」(『曹洞宗古文書』卷下、p. 619 『宝慶由紀記』)

(4) 佐橋法竜氏「義雲の宗教とその歴史的地位」(『印度学仏教学研究』二卷二号、昭和二十九年) 参照。

(5) 鏡島元隆氏編『道元禪』(第一巻) p. 97 (昭和三十五年、誠心書房刊) 参照。

(6) 『正法眼藏参註』の奥書によれば、「弘安二年(一二七九)己卯五月十七日在同国中浜新善光寺書写之、義雲」(『正法眼藏註解全書』卷八、p. 563~4) とあり、『同安居参註』の奥書には「弘安二年夏安居五月念日同国中浜新善光寺書写之、義雲」(『同註解全書』卷八、p. 656) とあり、『同帰依三宝参註』の奥書には「弘安二年己卯夏安居五月二十一日、在越宇中浜新善光寺書写之。諸本作己卯写誤、後建長五年癸丑己二十有六年、蓋義雲和尚至今歳二十七也」(『同註解全書』卷九、p. 317) とある。

(7) 『眼藏』(四禪比丘) には「仏法いまだ其要見性にあらず、七年

佛・西天二十八祖、いづれのところにか、仏法ただ見性のみなりとある。六祖壇経に見性の言あり、かの書、これ偽書なり、付法藏の書にあらず、曹溪の言句にあらず、仏祖の児孫、またく依用せざる書なり。」(岩波文庫本、下、p. 215) とあり、同(山水経)にも、「転境転心は大聖の所呵なり、説心説性は仏祖の所不肖なり、見心見性は外道の活計なり、滯言滯句は解脱の道著にあらず。」(岩波文庫本、上、p. 219) とある。

(8) 河村孝道氏「『正法眼藏』成立の諸問題(四)」60巻巻本『正法眼藏』を逸つて(1) (『印度学仏教学研究』二十一巻二号、昭和四十八年三月)、同氏「『正法眼藏』成立の諸問題

(五)「正法眼藏新輯論を逸つて(1)」(『印度学仏教学研究』二十二巻二号、昭和四十九年三月)、及び柳田聖山氏「仮字正法眼藏の秘密」(『展望』二百十号、一九七六年六月) 参照。

(9) 禅僧の最も古い詩歌は、三祖僧璨の『信心銘』とされ、永嘉玄覺(六七五~七一三)の『証道歌』、石頭希遷(七〇〇~七九一)の『參同契』、洞山良价(八〇七~八六九)の『宝鏡三昧歌』なども有名である。また中国の隱棲の伝統の上に立つ山居修道の禅僧に「樂道歌」と呼ばれる一群の長詩があり、南嶽懶瓊・福先仁儉・道吾円智(七三九~八三五)などが代表的な作者として知られている。一方、詩僧と呼ばれる人々も存し、主に詩作を通して士大夫階級と接触していた。

さらに、歴代禪匠の開悟投機の境界も多く偈頌の形式で表現されているが、このような禅僧の詩作が一般化した背景には「伝法偈」の成立が重要な役割りを果していると思われる。

市原亨吉氏「中唐初期における江左の詩僧について」(『東方学報』京都第二十八冊、昭和三十三年三月)、木下一真氏「中國の禪籍にあらわれた詩歌の研究」(『駒沢大学仏教学部論集』第一号、昭和四十六年三月)等参照。

(10) 玉村竹二氏『五山文学』(昭和四十一年十一月) p.53

(11)『大慧普說』に「今時学道者、多不自疑却疑他人。所以道、大疑之下必有大悟。且道悟得箇甚麼。良久云、我不敢輕於汝等、汝等皆當作佛。下座。」(T. 47 p. 886 a) とある。

(12)『大慧普覺禪師語錄』卷一「徑山能仁禪院語錄」の結夏上堂に

「結夏上堂、此日諸方叢林、莫不踞菩薩乘修寂滅行。以大円覺為我伽藍、身心安穩平等性智。徑山又且不然、從今日去九日內、與諸衲子共喫無米飯、咬優曇根、飲不濕水、說睡夢語。且道、恁麼修行與諸方結制、相去多少。良久云、將此深心奉塵刹、是則名為報仏恩。下座。」(T. 47 p. 819 c) とあり、黙照・綿密安祥の禪の裏にひそみがちな無為消極の禪風に対する批判的態度が感じられる。

(13)『義雲録』「寶慶寺語錄」に「上堂、朝打三千、仏祖不証、暮打八百、狸奴悉知。順行也、達磨西來九年面壁、逆行也、庭前柏樹枝葉成堆。一念萬年、如以鏡鑄像、萬年一念、似以像鑄鏡。為甚恁麼。大眾還會麼。良久云、丙丁童子來求火、天上斗星廓照空」(T. 82 p. 461 a) とあり、他にも「鏡」の比喩を用いた示衆は所々に見られる。

(14) 東明慧日の語錄『白雲東明和尚語錄』には、洞山・曹山の語や『寶鏡三昧』をさかんに引用し、五位を高く掲げて宗旨を挙揚しており、東陵永璵についても、後に入元して東陽德輝

の法を嗣ぐ中巖円月(一三〇〇~一三七五)は若くして東陵について五位説を受けており、『偏正五位圖説』を著わした無尽省燈も東陵の下で久しく五位の研鑽をしている。詳しく述稿「鎌倉における曹洞宗宏智派の消長」(『印度學仏教學研究』二十二卷二号、昭和四十九年三月)・「曹洞宗宏智派の五位思想」(『宗教研究』四十七卷三輯、昭和四十九年三月)・「日本曹洞宗宏智派における東陵永璵の位置」(『宗教研究』四十八卷三輯、昭和五十年三月)等参照。

(15) 佐橋法竜氏前掲論文。

(16) 佐橋法竜氏「五偏五位説の研究」(『宗學研究』第一卷第一号、昭和三十一年三月)・石附勝龍氏「偏正五位異説の源流」(『宗學研究』第十二号、昭和四十五年三月)・「太陽警玄禪師における中国曹洞宗旨復古の位置」(『宗學研究』第十三号、昭和四十六年三月)・「同」(『同』誌第十四号、昭和四十七年三月)・「同」(『同』誌第十五号、昭和四十八年三月)及び同氏諸論考参照。

(17) 義雲の伝記については、竜堂即門の「義雲和尚略傳」(『義雲錄』附)・『建撕記』その他いづれも、洛陽の人で二十四歳もしくは二十五歳で寂円に従つたとするが、それまでの経過については全く不明である。

(18) 中岩の『自曆譜』暦応二年己卯(一三三九)条に「冬下上州利根郡吉祥寺。十二月初三、追薦江州陞座次、表法嗣百丈老師之意。既上鎌倉、洞宗之徒憤然欲害予。時不聞在京、別源東白和会無事而已」(『五山文学全集』第一輯 p. 154)とある。

(19) この時期の中岩の行動を『自歴譜』によつて見てみると次の如くである。

(正和) 三年甲寅(一三一四)

予在万寿雲屋和尚会下作頌甚多。雲屋称奇也。是歲建長

災。仏燈退院。冬礼円覚東明和尚為受業師。

四年乙卯(一三一五)

是歲十六。春挂搭円覚。夏三日病。

五年丙辰(一三一六)

象外援予於東明和尚、扣以洞下之旨。然予心粗不達其密意。

文保元年丁巳(一三一七)

東明和尚遷寿福、南山和尚上円覚。

二年戊午(一三一八)

予十九歳。起円覚到博多、欲出江南、綱司不許上船而帰。夏在京之万寿絶崖和尚会下。冬到越前参永平義雲、略通洞宗語言。是歲靈山和尚観國韶石門同帰朝。

後醍醐天皇元応元年己未(一三一九)

春辞永平帰鎌倉參淨妙玉山和尚不契、再観東明和尚於建長挂搭。同十月、東明和尚退。靈山和尚住建長、朝夕入室參問。以曾在円覚相識見異愛。常作頌多稱賞。

(20)『義雲録』(卷下)の「拾遺義雲和尚永平禪寺語錄」には「当

山初祖云」として道元の語錄からの引用と見られる一文が存するが(附録II-10参照)、この文は『永平廣錄』には該當箇所が無い。「拾遺語錄」は江戸時代正徳五年(一七一五)の『義雲録』再刊の際に宝慶寺室中に存したものを作成して収

録したものであり、もしこれが宝慶寺における語錄が混入したものとすれば、極めて珍らしい寂円の語の引用となるであろう。

〔附録〕

『義雲和尚語録』の引用語録対照資料

凡例

一、本篇は、『義雲和尚語録』における多くの引用語録のうち、『宏智録』からの直接の引用、及び明らかに『宏智録』を前提すると見られる語句について、これを対照させてその引用状況を明らかにしたものであり、参考までに、『永平広録』及び『如淨録』の二点についても、同様の方法で該当箇所を対照させ示した。

一、『義雲録』の本文は、便宜上、大正蔵經八十二卷所収の正徳五年（一七一五）本によつたが、巻上の部分の異本である内閣文庫所蔵の『義雲録』との主な異同については、（）内に示しておいた。内閣文庫本『義雲和尚語録』については、拙稿「内閣文庫本『義雲和尚語録』について」（『印度学仏教学研究』第二十四卷第一号、昭和五十年十二月）、及び「内閣文庫本『義雲和尚語録』」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第八号、昭和五十一年九月）を参照されたい。

一、『宏智録』の本文は、泉福寺所蔵の宋版六巻本を用いたが、大正蔵經四十八卷所収の宝永五年（一七〇八）

刊行九巻本『宏智禪師広録』の所在箇所も便宜上併記しておいた。

一、『永平広録』については、延宝元年（一六七三）刊行の流布本広録に比して、門鶴本広録の方が文体上から『義雲録』の引用により近いので、昭和四十五年刊大久保道舟編『道元禪師全集』（下巻）所収の門鶴本を用いた。

一、『如淨録』の本文は、大正蔵經四十八卷所収の延宝八年（一六八〇）刊行本によつた。

I 『宏智録』の引用

義 雲 録	宏 智 録
(1) 上堂、廓爾而靈、本光自照、寂然而應、大用現前。	上堂云、好諸禪德、廓爾而靈、本光自照、寂然而應、大用現前。
木馬嘶風不運今時之步、泥牛出海耕破空劫之春。諸人相委悉麼。玉人招手處、復妙在廻途。（卷上、T.82 p. 460 c）	木馬嘶風不運今時之步、泥牛出海耕開空劫之春。諸人還相委悉麼。良久云、玉人招手處、復妙在廻途。（卷一、六丁左）（卷一、T.48 p. 2 a）
(2) 半夏上堂、（中略）作麼生	血脉不斷處、作麼生行履。還

是第一義諦。良久云、翡翠

是第一義諦。良久云、翡翠
踏荷翻葉雨、鶯鶯衝破竹林
煙。(卷上、T. 82 p. 460)
c)

翡翠踏翻荷葉雨、
體悉得麼。

體悉得麼。翡翠踏翻荷葉雨、
鷺鷥衝破竹林煙。（卷三、八
丁）（卷四、T. 48 p. 37 b）

絕待前後際斷。為甚有箇通路。良久云、偏正不曾離本位、無生那涉語因緣。（卷上 T. 82 p. 462 a ~ b）

T. 48 p. 59 b

(3) 上堂、世尊有密語、迦葉不
覆藏。死中有活、不被空
礙。活中有死、不被物礙。

題
卷四
三
右
卷五

云、偏正不曾離本位、無生
那涉語因緣。〔卷上、T. 82
p. 463 a)

和尚道、爾有拄杖子与爾拄杖子、爾無拄杖子奪爾拄杖子。畢竟作麼生。心地含諸種、普雨悉皆生、既悟華情已、菩提果自成。（卷上、

爾有柱杖子我与爾柱杖子、爾無柱杖子我奪爾柱杖子。所以六祖云、心地含諸種、普雨悉皆萌、既悟花情已、菩提果自成。方知当处出生、随处滅尽。珍重。(卷四、四丁右)

(3) 歲旦上堂、拳、宏智禪師
云、歲朝坐禪万事自然、心
心絕待仏仏現前。清白十分
江上雪、謝郎滿意釣魚船。
(卷上、T. 82 p. 462 b ~
c)

T. 82 p. 460 c ~461 a)

左(卷五、T.48 p.58c)

(6) 師云、大眾要會首山契風穴

(4) 謝新旧維那上堂、鉗槌轉掌
握中、摧有摧無、仏祖來舉
唱處、作模作樣。朝打三
千、進前成功、暮打八百、
退後就位。雖然恁麼、新旧

默時一字一点無欠少、說時一
言一句沒分外。語默不到處、
古今無盡時、作麼生行履。偏
正不曾離本位、無生那涉語因
緣。(卷四、五丁左)(卷五、

底意旨麼。良久云、塵中雖有隱形術、爭似全身入帝鄉。(卷上、T. 82 p. 462c)

直饒恁麼去、猶是一切處平常
自在受用底時節、所謂塵中雖
有隱身術、爭似全身入帝鄉。
(卷四、三十一丁左) (三十一
丁右) (卷五、T. 48 p. 68 c)

(8) 上堂、万機休罷、千聖不
携、一言相契、古今一揆
(撥)。暗中著眼、明裡藏
身。借位明功、体在用處。
借功明位、用在体處。所以
道、君臨臣位猶帶凝然。子
就父時尚存孝養。玉闕未透
正迷一色、宝印全提露那文
彩。還要委悉麼。傍觀者
哂、當局者迷。(卷上、T.
c)

汝亦行。結制順諸仏、禁足護衆生。金鎖無鬚両頭動、靈犀有中量間明。泥牛入海恰半夜、木鷄喚月看五更。雲倚山是父子、眼約眉為兄弟。三世同參、成一段合宗家之事。大千等量破微塵、出自己之經。

(10) 未審先師平生是甚麼心行。
使吉祥孤雲嶺之風月排薦福
深岳林之巖扇。此風隨西來
三周掉而滿。此月逐南海一
葦船而來。(卷上、T. 82 p. 463
a)

窮、寂寂惺惺真照之機不昧。
雲倚山而是父，箇中功就於
功。月在水而為家，直下住無
所住。云云。（卷一、三十四
丁左）（卷一、T. 48 p. 9 b）
且作麼生說箇通變底道理，還
會麼。清風隨棹滿，明月逐舟
來。（卷一、九丁左）（卷一、
T. 48 p. 3 a）

(8) 上堂、万機休罷、千聖不
携、一言相契、古今一揆
(撥)。暗中著眼、明裡藏
身。借位明功、体在用處。
借功明位、用在体處。所以

小參云、君臨臣位猶帶凝然。

(11) 上堂、心心無異心、一心一
切法。念念非異念、一念是
万年。(卷上、T.82 p.463)

心無異心，而法無異法。法無異法，而心無異心。（卷四、三十九丁左）（卷五、T. 48 p. 71b）

(9) 上堂、白雲以山而為父、明
道、君臨臣位猶帶凝然。子
就父時尚存孝養。玉閨未透
正迷一色、寶印全提露那文
彩。還要委悉麼。傍觀者
哂、當局者迷。(卷上、T.
82 p. 463 a)

(卷四、三十九丁左) (卷五、
T. 48 p. 71 b)

(12) 上堂、十方無壁落、從來絕
遮欄。四面亦無門、這裡入
處、瞎却眼睛而与七仏諸祖
相見、分明言理而与灯籠露
柱談論。當恁麼時、頑石点
頭、草木現瑞。(卷上、T.
82 p. 464 a)

小參云、兄弟、十方無壁落、
從本來元沒遮欄。四面亦無
門、祇者裏便是入處。可謂、
通途息耗叶路當風。云云。
(卷一、五十七丁左) (卷一、
T. 48 p. 15 a)

(13) 上堂、一物長靈、万戸俱

透、百草本明明、祖意自了了。天普覆兮、人人頂相

円。地普載兮、箇箇脚跟

平。於此薦得、一也不是、

二也不成。向什麼處鼓唇

皮。還会麼。良久云。風月

寒清古渡頭、夜船撥轉琉璃

地。(卷上、T. 82 p. 464 a.)

(14) 結夏上堂、尽乾坤大法界、是我一箇身便能禁足。遍塵刹諸有情、是我真箇漢、方解護生。禁足也、步步不妄移、護生也、心心不妄動。

所以道、以大圓覺為我伽藍、身心安居、平等性智。佛到此同歸、人住此法爾。還要委悉麼。一輪皎月大圓覺、刹海三千鉄一團、步步点空無朕跡、人人喚為我伽藍。(卷上、T. 82 p.

464 c)

上堂云、心不能緣、口不能議。直須退步荷擔。切忌當頭觸諱。風月寒清古渡頭、夜船撥轉琉璃地。參。(卷一、十三丁右)(卷一、T. 48 p. 4 a)

464 c ~ 465 a)

(15) 謝監寺上堂、(中略) 玄則

丙丁因緣、楊岐挾路相見、亦是非分外。良久云、金繩搜轉泥牛鼻、半夜馳驅來海上耕。(卷上、T. 82 p.

464 c ~ 465 a)

(16) 先師道、尽十方世界是箇真

實人体。還見僧堂麼。豎払子云、這箇是永平払子、那

箇是真實体。和尚莫眼花。

眼裏無筋一世貧。先師遷化肉猶煖在。水自竹邊流出綠、風從花裏過來香。(卷三、上、T. 82 p. 465 b)

(17) 上堂、拳、僧問首山(風穴)、一切諸

藐三菩提法皆從此經出。如何是此經。穴

云、低聲。僧云、如何受持。山(穴)云、莫染汚。宏智

上堂云、百骸俱潰散、一物鎮長靈。白雲功盡青山秀、青山路轉白雲迎。不曾死不曾生。金繩搜轉泥牛鼻、半夜馳驅來海上耕。(卷一、十七丁右)(卷一、T. 48 p. 5 a)

464 c ~ 465 a)

諸禪德、若恁麼體得、方知

道、借功明位、用在體處、借

位明功、體在用處。體用無私

方知乃唱道。且道作麼生是體

用無私底時節。水向竹邊流出綠、風從花裏過來香。(卷三、十九丁左)(卷四、T. 48 p.

41 a ~ b)

示衆、拳、僧問風穴、一切諸

佛及諸阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出。如何是此經。穴

云、低聲。僧云、如何受持。山(穴)云、莫染染。師云、來問此經、低聲、大千卷自塵中出。

三世佛從口裏生。天得一以清、地得一以寧。空無依兮谷

低声。大千卷自塵中出、三

世仏從口裡生。天得一以

清、地得一以寧。空無依兮
不盈、摩訶般若波羅蜜。落日

日漁樵歌太平。師曰、永平
不借二老舌頭、欲重宣此

義。良久云、舌相廣大(長)
転此經、近聞溪澗水無聲、

百千妙義許誰解、風入梧桐
秋始成。(卷上、T. 82 p.

465 b)

(18) 上堂、本性一靈之光明与時
發起、通身回互之手眼触處

相宜。眼處聞声而明歷歷、
耳處見色而淨裸裸。石人似

汝兮能唱巴歌、處處入普門
境。諸人要委悉這箇道理
麼。古渡風清一片秋、月色
江光冷相照。(卷上、T. 82

p. 465 c)

不盈。摩訶般若波羅密。落日
漁樵歌太平。(卷三、五十一
丁右～左)(卷四、T. 48 p.
52 b)

漁樵歌太平。(卷三、五十一
丁右～左)(卷四、T. 48 p.
52 b)

(19) 除夜小參、廓爾而靈、本來

光明自照、寂然而念、特地
大用現前。向去底泥牛入海

沒消息、却來底木雞唱曉発
元極。(卷上、T. 82 p. 466

b)

(20) 永平入院小參。(中略) 既
得恁麼手段、作麼生的當。

莫道鯤鯨無羽翼、今日親從鳥
道回。(卷上、T. 82 p.

466 c)

(21) 復舉宏智古仏歲朝上堂、師

統韻曰、擊破三千二儀廓
然、春含浩劫古今在前。蜂

舞不崩枝上葉、人歌無影樹

船。參。(卷三、四十六丁左
～四十七丁右)(卷四、T. 48
p. 50 c)

a～b)

a)

上堂云、好諸禪德、廓爾而

靈、本光自照、寂然而念、大
用現前。木馬嘶風不運今時之
步、泥牛出海耕開空劫之春。

云云。(卷一六丁左)(卷一、
T. 48 p. 2 a)

進云、如何是正中來。師云、

莫道鯤鯨無羽翼、今日親從鳥
道回。(卷一、六十一丁右)

(卷一、T. 48 p. 16 a)

歲旦上堂、歲朝坐禪万事自
然、心心絕待仏仏現前。清白

十分江上雪、謝郎滿意釣魚
船。參。(卷三、四十六丁左
～四十七丁右)(卷四、T. 48
p. 50 c)

四月八日上堂。(中略) 諸仁
者、只如杓柄在你手裏時、合
作麼生。不因一事不長一智。
事無達一智。(卷下、T. 82
十丁左)(卷四、T. 48 p. 38

T. 48 p. 47 c ~48 a)

T. 48 p. 47 c ~48 a

(23) 上堂、曹山因僧問、真儔出

世也否。山曰、不出世。僧

云、争奈真仮何。山曰、瑠

璃瓶子口。僧無語。宏智古

仏拈曰、通身及尽徹底無

撒手与来随处得用。還依。

識曹山老漢麼。當戶無影

迹、遍界不曾藏。師拈曰、

者僧看煙怪火、曹山只解藏
身、不覓露角。云智愚譖志

身不覓露角。宏智恐猶涉

多岐永平分上又且如何

唐体清虛不渺緣 元來心月

白狐凹 誰臻這裏論存沒
也終須刀看斧賈。
(卷一)

色聚頭辺看普賢
(卷下)

1. 82 p. 4110

○兄弟須知。生生死死輪廻之

迹無窮 卓卓的的參學之機
不昧。白雲倚山而以山為

父、箇中之功至無功。明月
栖水而以水為家、直下之住
無所住。離見聞覺知而有

拳、僧問石霜、真身還出世也無。霜云、不出世。僧云、爭奈真身何。霜云、琉璃餅子口。師云、通身及尽徹底無功、撒手與來隨處得用。還識石霜老漢麼。當堂無影迹、遍界不曾藏。（卷二、拈古九丁左）（卷三、T. 48 p. 29c）

拳、僧問石霜、真身還出世也無。霜云、不出世。僧云、爭奈真身何。霜云、琉璃鉢子口。師云、通身及尽徹底無功、撒手興來隨處得用。還識石霜老漢麼。當堂無影迹、遍界不曾藏。
(卷二、拈古九丁左) (卷二、T. 48 p. 29c)

智、非生滅之心。離地水火
風而有身、非和合之相。所
以道、四大性自復、如子得
其母。兄弟作麼生得恁麼
会。良久曰、霜天月落夜將
半、誰與澄潭照影寒。（卷

合相。所以道、四大性自復、
如子得其母。諸禪德、作麼生
行履得恁麼相應去。還会麼。
霜天月落夜將半、誰共澄潭照
影寒。（卷一、三十四丁左）
(卷一、T. 48 p. 9b ~ c)

智、非生滅之心。離地水火
風而有身、非和合之相。所
以道、四大性自復、如子得
其母。兄弟作麼生得恁麼
会。良久曰、霜天月落夜將
半、誰與澄潭照影寒。（卷
下、T. 82 p. 472a ~ b）

(25) 復舉、僧問文殊、達磨是祖
也不。殊曰、不是祖。僧
云、既不祖、何用西來。殊
曰、為汝不薦祖。僧云、薦
後如何。殊曰、方知不是
祖。師曰、喚為祖則触、喚
不為祖則背。超触越背、如
何商量。頌曰、仏仏命根藤
倚樹、人人心地月開池。春
過百鳥不來処、風馥殘梅徹
笑枝。（卷下、T. 82 p. 472c ~ d）

合相。所以道、四大性自復、如子得其母。諸禪德、作麼生行履得恁麼相應去。還会麼。霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒。（卷一、三十四丁左）
(卷一、T. 48 p. 9b~c)

師乃拳、僧問文殊、達磨還是祖否。殊云、不是祖。僧云、既不是祖、何用西來。殊云、為汝不薦祖。僧云、薦後如何。殊云、方知不是祖。師云、阿那是祖位崇家譜。二儀之根万象之母。建化門未要転機、實際地如何進步。青山一線路相通、月落寒猿啼斷處。
(卷三、九丁左) (卷四、T.
48 p. 37c)

合相。所以道、四大性自復、如子得其母。諸禪德、作麼生行履得恁麼相應去。還会麼。霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒。（卷一、三十四丁左）
(卷一、T. 48 p. 9b ~ c)

如子得其母。諸禪德、作麼生行履得恁麼相應去。還会麼。霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒。(卷一、三十四丁左)
(卷一、T. 48 p. 9b ~ c)

情授記。賢劫千仏孰是無情
仏耶。師曰、如皇太子未即
位時但一身耳。即位後國土
山河盡皆屬王。有情受記作
佛時無情作佛、何有無情別
得受記。宏智古佛拈云、刹
中之佛処處現身、佛中之刹
塵塵皆爾。又云、六國自清
紛擾事、一人独恣太平基。
永平門下又且如何。一輪自
転十虛明、破鏡無台重不
照。今朝成道底又作麼生。
頌云、兀兀靜中鼻息高、風
刀快斷葛藤巢。曉星落失眼
睛裏、忽地出頭舒白毫。
(卷下、T. 82 p. 473 c)

(27) 永平禪寺鐘銘并序。(中略)
千仏同風、一音是從、前後
際斷、緊漫相交。迎臨欄
月、送度林風。債魚業淨、
化蝶夢回。(卷下、T. 82
p. 476 a)

耶。國師云、如皇太子未受位
時唯一身耳。受位之後國土尽
屬於王、寧有國土別受位乎。
今但有情受記作佛之時、十方
國土悉是遮那佛身。那得更有
無情受記耶。師云、刹中之佛
処處現身、佛中之刹塵塵皆
爾。還体悉得麼。良久云、六
國自清紛擾事、一人独擅太平
基。(卷一、二十二丁左)(卷
一、T. 48 p. 6 b)

(28) 第十四空華死水裏龍吟。
(卷下、T. 82 p. 476 b)

II 『永平広録』の引用

義雲録	永平広録
(1) 且道、大衆如賓主相對、具 什麼手眼。還會麼。覲面難 呈向上機、家風萬古為人 施。(卷上、T. 82 p. 460 c)	冬至小參、拳、僧問趙州、如 何是祖師西來意。師云、爾舌 頭是吾舌頭、州云、庭前柏樹 子。師云、覲面難呈向上機、 家風萬古為人施。(卷八、全 集下卷 p. 145)

(2) 開爐上堂、永平初祖云、火
爐今日大開口、廣說諸經次
第文。鍊得寒灰鐵漢、心心
片片目前殷。師云、深撥冷
灰看小火、驀頭開示転真
文。點炭似無意、陝府鐵牛

鍊得殷。（卷上、T. 82 p.

461a）

(3) 上堂、登山須到其頂、不到不知宇宙之寬。入海須徹其底、不徹不測滄溟之深。諸兄弟、入法須辨其通塞、不辨不得脱落之道。云々。（卷上、T. 82 p. 461b）

上堂、登山須到頂、入海須到底。登山不到頂、不知宇宙之寬廣。入海不到底、不知滄溟之淺深。既知寬廣、又知淺

深。一踢踢翻四大海、一推推倒須弥山。云々。（卷四、全集下卷 p. 68）

上堂云、吾仏謂諸弟子曰、有四念住、是諸人之所依也。所謂四念住者、觀身是不淨、觀心是無常、觀法是無我、永平亦有四念住、觀身是皮袋、觀受是鉢盂、觀心是

上堂、拳、古人拈起扇子云、

任爾千般巧、更看萬樣（般）

無兩樣風。山僧即不然。任

爾千般巧、更看萬樣風。遂放下扇子

云、興聖即不然。任爾千般

巧、更看萬樣風。招涼兼覩

月、只在一輪中。（卷上、

T. 82 p. 464b～c）

(6) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

體。作麼生是受念處。大海

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(7) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(8) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(9) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(10) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(11) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(12) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(13) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(14) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(15) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(16) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、

T. 82 p. 461c）

(17) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、
T. 82 p. 461c）

(18) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、
T. 82 p. 461c）

(19) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、
T. 82 p. 461c）

(20) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

麼。過橋村酒美、隔岸野花

元不辭衆流。作麼生是心念

處。山河大地日月星辰。作

麼生是法念處。說似一物即

不中不涉諸心數。向上一句

又作麼生。良久云、一念無

念、念念不住。參。（卷上、
T. 82 p. 461c）

(21) 復拳（上堂、記得）、世尊

一日与阿難行次、見一塔廟

便作禮。阿難問曰、是何人

塔廟。仏言、是過去諸仏塔

廟。（中略）師云、逢仏則

拜仏、騎牛更覓牛。還委悉

香。水向竹辺線、月当松頂涼。

(卷上、T. 82 p. 464 c)

(7) 記得、当山初祖結夏小參、

拳、慈航禪師道、參禪人第

一鼻孔端正、次眼目清明、

其後貴宗說俱到。祖云、大

衆要會鼻孔端正之道理麼。

若也得、穿破鼻孔了也。

要會眼目清明麼。便是被傍

觀人換却木樁子了也。要會

宗說到麼。以扒子擊禪床一

下云、宗也到說也到。向上

又有方便在。慈航又云、九

十長期明日始、莫將繩墨外

辺行。永平今夜繞(以)此

兩句為禁足規繩。九十長期

明日始、莫將繩墨外辺行。

草鞋拄杖都盧脫、但愛瞿曇

活眼睛。師曰、山僧統尊韻

而重宣此義。祖宗機要正分

明、繩墨為規只麼行、雲倚

(依)青山子帰父、豁開鐵眼
与銅眼。(久立珍重。)(卷上、T. 82 p. 466 c ~ 467

結夏小參云、慈航禪師者黃竜

下尊宿也。住天童三十年。曾

遇結夏小參云、參禪人第一鼻

孔端正、次眼目精明、其後貴

宗說俱到。大衆、要會慈航老

人道鼻孔端正道理麼。若也得、

便穿破鼻孔了也。要會眼

睛精明麼。便是被傍觀人換卻

木樁子了也。要會宗說俱到

麼。以扒子擊禪牀一下云、宗

也到、說也到。向上更有方便

在。慈航老人又云、九十長期

明日始、不以繩墨外辺、大衆

須知、此好語也。永平今夜為

諸人道人。大衆、要會不以繩

墨外辺行麼。始自明日至于解

制、九旬間、三月之中、左之

右之、從東過西、超仏越祖、

無人犯法、所以重法也。後

(依)青山子帰父、豁開鐵眼
与銅眼。(久立珍重。)(卷上、T. 82 p. 466 c ~ 467 a)

(8) 上堂、當山初祖拳、梁武帝

問達磨、如何是聖諦第一

義。磨曰、廓然無聖。帝

也到、說也到。向上更有方便

在。慈航老人又云、九十長期

明日始、不以繩墨外辺、大衆

須知、此好語也。永平今夜為

諸人道人。大衆、要會不以繩

墨外辺行麼。始自明日至于解

制、九旬間、三月之中、左之

右之、從東過西、超仏越祖、

無人犯法、所以重法也。後

人犯法。後來雖行五刑之辛

堂、入仏殿、到廚庫、到三門、不行繩墨之外辺也。一切

仏祖、一切衲僧、俱行不得繩

墨之外也。欲行繩墨外、未能

得也。雖然如是、永平今夜統

慈航禪師兩句、以為九旬禁足

之証驗。良久云、九十長期明

日始、不以繩墨外辺行、草鞋

拄杖都盧脫、只愛瞿曇活眼

睛。久立衆慈、伏惟珍重。

(卷八、全集下卷 p. 147)

所以梁武帝問初祖、如何是聖

諦第一義。祖云、廓然無聖。

帝曰、對朕者誰。祖云、不

識。只遮不識、無人知得已經

數代。如今大宋現在諸山、坐

貌座称人天師者、未嘗得会。

苦哉、苦哉。云云。(卷四、

全集下卷 p. 74)

晚間上堂云、昔唐虞有犯法

者、只画其衣服而已。雖然無

人犯法。後來雖行五刑之辛

來雖行五刑辛法而多人犯

法、屢多犯法之人。唐虞之画

p. 472 a)

法。是所以不重法也。我儻幸遇不可比唐虞之仏正法、

衣、無人犯法、豈犯仏法者哉。如有犯者、乃不重仏法

(11) 仏言、上上因縁故生於南洲。(中略) 就中當山初祖、

除夜小參云、夫小參者、仏祖祖之家訓也。我日本國、前代未嘗聞其名字、何況行乎。

縱不画衣服、豈犯法者乎。若又犯之、不重仏法也。苦哉。復拳、南泉問黃檗、什

泉問黃檗、甚處去。檗云、抆菜去。泉云、將甚麼抆。檗豎起刀子。泉云、只解作客不解作。南泉。黃檗、作家相見雖

是恁麼、若是大仏別有商量。當黃檗豎起刀子時、代南泉向

永平始而伝之以来、已經二十年矣。國之運也、人之幸也。所以者何、祖師西來、謂入震

麼處去。蘖云、抆菜去。泉

和尚、倒却謾幢身心脱落、

遙航万里曠海、親見天童淨

曰、將什麼抆。蘖豎起刀子。泉

佛祖宗風始通扶桑國。國之運也、人之幸也。其思如

山、其德如海。(卷下、T. 82 p. 472 c)

82 p. 472 c)

主。祖拈云、若大仏當黃檗豎起刀子時、代南泉向

王庫內無如是刀。大仏門下

(12) 第三十六羅漢、破的破塵。

(卷下、T. 82 p. 477 b)

中秋上堂云、前仏後仏同共証明、這邊那邊互相印照、當陽

又且如何。劍去久矣。莫敢刻船。師曰為甚如是道。良

久曰、陶壁靈梭起雲吐霧。

(卷下、T. 82 p. 471 b)

顯赫直下承當、破的破塵有殺有活。云云。(卷下、全集下卷 p. 26)

(10) 当山初祖云、夫仏祖向上參學、先須觀無常迅速、莫敢以忘。若忘無常生滅者、職由常顛倒也。三世十方諸

諸祖之法、元不在凡夫之常顛倒中也。(卷下、T. 82

III 『如淨錄』の用

義 雲 錄

如 淨 錄

(1) 仏成道上堂、拳、古德云、臘八上堂、瞿曇打失眼睛時、

臘八上堂、瞿曇打失眼睛時、

瞿曇打失眼睛時、雪裡梅花

只一枝。而今到處成荆棘、

却笑春風繚亂吹。師云、梅

說禪、清涼念詩。還當得麼。

其如不然、燒香點燭拌泥團、

樹歲寒自有時、芳心偷綻旧

年枝。先春漏泄陽春曲、黃

面自橫鐵笛吹。(卷上、T.

82 p. 462 b)

(2)復舉、百丈因僧問、如何是

奇特事。丈云、獨坐大雄

峯。天童淨和尚拈曰、大衆

不動著、且教坐殺者漢。今

日忽有人問淨上座如何是奇

特事、只向他道、有甚奇

特。畢竟如何。淨慈鉢盂移

過天童喫飯。師曰、即今有

人問山僧奇特事、對他道、
一枝藤打人有力、一瓶水受
用無窮。(卷上、T. 82 p.

464 a)

(3)前後際斷兮古今住無諍三
昧、來去無蹤兮風煙橫古渡
頭辺。如殘臘已極新歲未

雪裡梅花只一枝。而今到處成
荊棘、却笑春風繚亂吹。諸方

說禪、清涼念詩。還當得麼。

其如不然、燒香點燭拌泥團、

樹後遼天鷁子飛。(卷上、T.

48 p. 122 c ~ 123 a)

復舉、記得、僧問百丈、如何

是奇特事。百丈云、獨坐大雄

峯。大衆不得動著。且教坐殺

者漢。今日忽有人、問淨上座

如何是奇特事、只向它道、有

甚奇特。畢竟如何。淨慈鉢盂

移過天童喫飯。(卷上、T. 48

p. 127 b)

(4)歲朝上堂、青天得一以清、
白日得一以明。年得一以稔、
月得一以盈。人得一康樂、
國得一太平。以何為驗。雨
含一味潤、土吐万物榮。

(卷下、T. 82 p. 469 a)

(5)第九古仏心、撞牆撞壁。
(卷下、T. 82 p. 476 b)

上堂、今朝二月初一、扒子眼
睛凸出、明似鏡黑如漆。驀然
跨跳、吞却乾坤一色。衲僧門
下猶是撞牆撞壁。畢竟如何。
尽情拈却笑、呵呵一任春、沒
奈何。(卷上、T. 48 p. 124 a)

(6)第三十三道得、蝦蟇啼蚯蚓
鳴。(卷下、T. 82 p. 477 a)
上堂、霖霪大雨、豁遠大晴。
蝦蟇啼蚯蚓鳴。古仏不曾過
去、發揮金剛眼睛。咄。葛藤
葛藤。(卷上、T. 48 p. 124 a)

到、中間如何措足。還委悉

音已前一句又作麼生。千光不

照空王殿、夜半烏雞帶雪飛。

烏雞帶雪飛。(卷上、T. 82

p. 466 b)

(卷上、T. 48 p. 122 a)

歲朝上堂、天得一以清、元正

啓祚、地得一以寧、万物咸

新。且道、衲僧得一。合作麼

生。太平歌有道、和氣笑迎

春。(卷上、T. 48 p. 124 c)

家、猶是兒孫邊事。且道、威

音已前一句又作麼生。千光不

照空王殿、夜半烏雞帶雪飛。

烏雞帶雪飛。(卷上、T. 82

p. 466 b)

(卷上、T. 48 p. 122 a)

歲朝上堂、天得一以清、元正

啓祚、地得一以寧、万物咸

新。且道、衲僧得一。合作麼

生。太平歌有道、和氣笑迎

春。(卷上、T. 48 p. 124 c)